

『おじいちゃんの柿』

鴨カモメ

6,956 文字

中学生の愛美は無口で怖い顔の祖父が苦手だった。祖父が手入れをしている柿の木は秋になると甘い実をつけ、庭に葉を落とす。祖母はその落ち葉をいつも丁寧に竹箒で掃除していた。亡くなった祖母の代わりに落ち葉掃除を引き受けた愛美は、柿と竹箒を通して祖父の本当の心を知っていく。

「ねえ愛美、ちょっと頼みたいことがあるんだけど」

「嫌だ」

内容を聞く前に断る私にお母さんは呆れ顔を浮かべた。お母さんの『ちょっと』ほど嘘くさいものはない。それでもお母さんは私を無視して話しを続けた。

「お母さんの代わりにおじいちゃんの家に行って庭の落ち葉を掃除してきてほしいのよ。今日行くって言ってあったんだけど、用事ができて行けなくなっちゃったのよね」

「全然ちょっとじゃない」

「ちょっと掃いてくるだけじゃない。今年はおばあちゃんがいないから落ち葉掃除をする人がなくて、今頃はきっと庭が柿の葉だらけになっているわ」

おばあちゃんは今年の春に突然亡くなった。それからはおじいちゃんが古い一軒家に一人で住んでいる。庭の柿の木はお母さんが子どもの時から生えている立派な木で夏には青々とした葉が小さな庭を覆いつくすほどだった。家族はみんなその木を『おじいちゃんの柿』と呼んでいた。

「おじいちゃんの柿なんだからおじいちゃんがやればいいのに」

「おじいちゃんの柿だけど掃除はおばあちゃんって決まっていたのよ。愛美は小さい頃によくおばあちゃんのお手伝いをしていたでしょ。すごく上手だって褒められていたわよね。あなたが掃除をしに行けば天国のおばあちゃんもきっと喜ぶわよ」

お母さんにそう言われるとなんだか申し訳ない気持ちになった。小学生までは親に連れられて会いに行っていたけれど、中学生になってからは理由をつけて行くことを避けていた。笑顔が優しいおばあちゃんとはともかく、私は顔が怖いおじいちゃんのが大の苦手だった。それなのにおじいちゃんと二人きりなんて耐えられそうにない。

「でも……」

渋る私にお母さんはにやりと笑った。

「行けば何かご褒美くれるかもしれないわよ」

「ご褒美？」

「そうご褒美！ ご褒美があれば頑張れるでしょ」

ご褒美と聞いて心が揺れる。この前、友達と映画に行って今月のおこずかいを使い果たしてしまったばかりだった。次のおこずかいまではまだ遠い。苦手なおじいちゃんにご褒美を天秤にかけ、私は心を決めた。

「しょうがないな」

ちょっと掃いて帰ってくるだけ。そう言い聞かせ私は落ち葉掃除に行くことにした。

おじいちゃんの家は歩いて5分くらいのところにある。その短い道のりもおじいちゃんのことを考えると憂鬱になった。おじいちゃんは無口でいつもむすっとした顔をしていた。日に焼けた黒い顔にぎよろりとした大きな目はどこかのお寺で見た閻魔大王とそっくりだった。だから私は目を合わせないようにおじいちゃんの前ではいつも俯いていた。

曲がり角までくると大きな柿の枝が塀からはみだしているのが見えた。真っ赤に紅葉した葉の間からは丸々とした実がのぞいている。中を覗くとお母さんの予想通り、小さな庭は落ち葉で埋もれていた。縁側のガラス戸が開いていたので私は玄関ではなくそちらへと回った。ガラス戸の奥は居間になっていて障子が閉められている。おじいちゃんはいつもこの障子の近くに座っていた。

「おじいちゃん、落ち葉掃除に来たよ」

中に向かって声をかけるとすぐに障子が開き、おじいちゃんが顔を出した。おじいちゃんは鋭い目で下から上に私を睨み上げた。お母さんが来る約束だったのに私が来たから怒っているのかもしれない。それとも遅かったから怒っているのだろうか。今にも怒鳴られそうなその雰囲気には心臓がドキドキと鳴る。

しかし、おじいちゃんは何も言わずに黙ったまま柿の木を指差した。そこには木に立てかけられた竹箒とちりとりがあった。

「これで掃除するの？」

恐る恐る聞くとおじいちゃんは「ああ」と小さく返事をした。そしてパタンと障子を閉めてしまった。

『お願いね』くらい言ってくれてもいいのに。早く掃除して帰ろう。竹箒を手にするると落ち葉に滑らせる。竹箒は地面とこすれて気持ちの良い音を立てた。葉はすぐにこんもりとし

た山になり、それをちりとりで取って袋の中へと入れていく。その作業を何回も繰り返した。

ザッザッザッザッ

静かな庭に竹箒の音が響く。どこか懐かしいその音が私はけっこう好きだった。

「こんなもんかな」

すっきりきれいになった庭を見てポンポンと腰を叩く。そして竹箒を元の場所へと立てかけた。

「おじいちゃん終わったよ」

声をかけると障子が開き、おじいちゃんは庭をじろじろと見渡した。そして柿の木で視線を止めた。

「持っていくか？」

「え？」

おじいちゃんは庭へ下りると脚立を出して、パチンパチンとハサミで柿の実を取り始めた。そして艶やかに光る黄色の実がたくさん入ったビニール袋を私に渡した。

「ありがとうな」

おじいちゃんは一言そう言うとまた家の中へと戻ってしまった。私はがっかりとしながら重いビニール袋を持って帰った。

家に帰るとたくさんの柿を見てお母さんは顔を輝かせた。

「わあ！ たくさん！ うれしいわあ、ご褒美は柿かなあって思っていたのよね～！」

「お母さん、ひどい」

「ご褒美がおこずかいだなんて一言も言ってないわよ」

笑いながらそう言うと早速袋から出して台所で皮をむき始めた。柿の断面はみずみずしくきれいな黄色をしていた。

「今年もおいしそうね！ 愛美も食べてみる？」

「えっ柿ってスーパーで売っているの以外は渋いんじゃないの？」

「何言っているの。おじいちゃんの柿は甘柿だから渋みなんてないのよ、ほら」

お母さんはそう言って剥いた柿を差し出したが私は首を振った。

「いらない。柿嫌いだし」

「食わず嫌いなんでもったいないわね」

私が受け取らなかった柿をお母さんは自分の口に入れると「おいしい」と言って顔をとりけさせた。そんなお母さんを見ても私はやっぱり食べる気にはなれない。それは小さな頃の苦い思い出が原因だった。

『さあ、食べ』

霞みがかかった記憶の中でおじいちゃんの顔だけがはっきりと浮かぶ。今よちも皺の少ないおじいちゃんはギロリと睨みをきかせると爪楊枝の刺さった柿を私に差し出した。低い声と鋭い目つきに脅されていると思った私は大泣きしてしまった。近くにいたお母さんに抱きつく後ろからおじいちゃんの声がした。

『食いたくないなら食わんでいい』

そのお腹に響くような声が怖くて私はさらに強くお母さんにしがみついた。それ以来、柿を見るとおじいちゃんの怖い顔と声を思い出して食べる気が失せてしまうのだった。

それから1週間後、私はまた落ち葉掃除をやるためにおじいちゃんの家に来ていた。次は断ろうと決めていたのにお母さんにはめられたのだ。

「そろそろ掃除をしないとまた庭が落ち葉でいっぱいでしょうねえ」

お母さんは洗濯物をたたみながらわざとらしい独り言を言った。

「私は行かないよ。今度はお母さんが行ってよ」

「じゃあ愛美が洗濯物をたたんで、買い物に行って、夕飯を作ってくれる？ あとお父さんのワイシャツのアイロンかけもね。それなら私が掃除に行ってくるわ」

山盛りになっている洗濯物を見て頬がぴくりと引きつる。黙って立ち上がりマフラーを手に取るとお母さんが私を呼び留めた。

「あ、愛美、また柿もらってきてね。もうなくなっちゃったから」

お母さんはそう微笑んで、落ち葉掃除に行く私を見送った。

庭は先週掃除をしたのが嘘のように、また落ち葉に埋め尽くされていた。柿の木には前回と同じように竹帚が立てかけてある。それを手に取ると家の中のおじいちゃんに向かって声をかけた。

「おじいちゃん、掃除始めるね」

私はおじいちゃんの返事を待たずに掃除を始めた。どうせ出てきてもすぐに障子を閉めてしまおうし、顔を合わせなくて済むのならその方がよかった。

パタンという小さな音に顔を上げるとおじいちゃんが居間から出て縁側に腰かけていた。おじいちゃんは掃除をする私をじっと見ている。それはなんだか監視されているみたいでやりにくかった。

ザッザッザッ

箒を動かしながらチラリと縁側を見るとおじいちゃんは腕を組み、目を閉じていた。その顔は眉間に皺をよせ難しい表情をしている。しかし、しばらくするとその怖い顔のままこくりこくりと舟をこぎ出した。穏やかな日差しに眠くなってしまったのだろうか、昼寝も怖い顔でするんだと思うとなんとかちょっとおかしかった。

「よし、終わり！」

きれいになった庭を見渡してから竹箒を木にたてかけた。縁側で昼寝をしていると思っていたおじいちゃんは立ち上がって私を手招きしている。開いた障子の向こうには、こたつの上にかごに入った柿と湯飲みが二つ用意してあるのが見えた。

私は戸惑いながらも縁側から家へと上がり、おじいちゃんの向かい側に座った。おじいちゃんは大きくつやつやとした柿を手に取るとフルーツナイフで皮を剥いていく。そして楕型に切った実を皿に盛り、爪楊枝をさした。

「柿はまだ嫌いか？」

「わからない。食べてないから」

「無理に食わんでもいいからな」

ぶっきらぼうなその言い方に私は恐る恐るおじいちゃんの顔を見た。年を取ったせいなのか灰色がかった瞳は怖いどころか柔らかな印象で、思っていたよりもおじいちゃんの顔は怖くなかった。

柿に刺さった爪楊枝の持ち手は全部私の方を向いていた。

せっかく切ってくれたのだから――

手を伸ばし、柿を一口食べてみる。すると柔らかな実はとろけて濃厚な甘さが口いっぱいに広がった。

「……おいしい」

「そうか」

おじいちゃんは温かいお茶を一口飲み、小さな声で言った。一切れ食べ終わると皿にまた手が伸びる。おじいちゃんの柿は癖になる美味しさだった。おじいちゃんがお茶を飲み終わる頃には山もりだった柿はすべて私のお腹の中へと入っていた。

「持っていきなさい」

おじいちゃんは柿が入ったビニール袋を台所から持ってきてくれた。それは前回よりもたくさん柿が入っていた。

「こんなにたくさんいいの？」

「ああ、まだまだあるからね」

障子の開いた居間からは庭の柿の木が良く見えた。木には数えきれないほどの柿の実がなっていた。上の方では熟した柿をヒヨドリがつつついている。ヒヨドリが動くたびに葉がひらひらと落ち、さっききれいにしたばかりの庭には、もう落ち葉が何枚か落ちていた。

「おじいちゃん、また来週も落ち葉掃除来るね」

「助かるよ」

おじいちゃんは風に揺れる柿の木を見ながら静かに言った。

柿をもりもりと食べる私をお母さんが面白そうに見ていた。

「あんなに嫌がっていたのにねえ」

「だっておいしいんだもん」

「そうじゃなくて落ち葉掃除のことよ」

おじいちゃんの柿の味を知ってから、家でも柿を食べるようになったのでお母さんは驚いていた。でもそれ以上にお母さんを驚かせたのは言われなくても週に1回のペースで落ち葉掃除に行くようになったことだった。

相変わらずおじいちゃんに会うのは緊張する。だけど家で食べる柿よりもおじいちゃんが剥いてくれた柿の方が美味しい気がした。

「おじいちゃんが掃除しないんだからしょうがないでしょ」

おじいちゃんの剥いてくれる柿が目的だなんて言えずにごまかすとお母さんはにやにやと笑った。

「何？」

「おじいちゃんも喜んでいだろうなと思って」

「喜ぶ？ そんなことないと思うけど」

おじいちゃんは何度行っても相変わらず無口で不愛想だった。掃除をしている間は怖い顔で縁側に座り、その後は柿を食べて柿がたくさん入った袋をくれる。ただそれだけだった。

「喜んでいよ。おじいちゃんね、おばあちゃんが亡くなってからずっと元気がなかったのよ。おばあちゃんの大好物だった柿の実も今年は木につけたままだったの。でもあなたが掃除に行くようになったら実を取るようになったでしょ。近所の人にも孫が美味いって食べてくれるんだって嬉しそうに話しているみたいよ」

「あのおじいちゃんが？」

「そうよ、あのおじいちゃんよ」

するとお母さんはくすくすと思い出し笑いを始めた。

「そういえば昔、面白いことがあったわ。あなたは小さくて覚えていないでしょうけどね。おじいちゃんが柿を剥いてあなたにあげようとしたのよ。でもおじいちゃんって見た目があんなでしょう？ あなた怖くて泣いちゃってねえ。『食いたくなかったら食わんでいい』なんて言っちゃって、情けない顔でおろおろしていたのよ。想像できないでしょ」

それは私が柿を嫌いになる原因になった出来事だった。怖くてお母さんに抱きついていた私には、その時のおじいちゃんの様子がわからなかった。

「それ以来、怖がらせたら可哀そうだからって、あなたに声をかけられなかったみたい。おじいちゃんは怖い顔をしているけど本当はとっても優しいのよ」

「そうだったんだ」

目を落とすと柿の乗っていた皿はもう空になっていた。

「もう1個食べる？ あら、この柿だいぶ熟れちゃっているわ」

お母さんがカゴに積まれた柿を掴むと表面が指の形に凹んでしまった。皮がうまく剥けないほどに熟れた柿はとても甘い、私はもう少しだけ固い方が好きだった。

肌を刺す冷たい風に身を縮めて歩く。色のない寂しい景色はもうすっかり冬めいていた。曲がり角で見えるおじいちゃんの柿の木にももう葉はない。枝に残った黄色の実だけが控えめに彩を添えていた。

「おじいちゃん、掃除始めるね」

少しだけ開いているガラス戸に向かって声をかける。掃除をしてみると言っても庭の落ち葉ももうほとんどない。あるのは乾いてカサカサになった茶色い枯れ葉がところどころに落ちているだけだった。私は竹箒を手にとってそれらをかき集めていった。

ザッザッザという音が乾いた空気に響いていく。箒の音に呼ばれるように障子が開いておじいちゃんが顔を出した。おじいちゃんは庭へおり、ちりとりを持つと掃除を手伝ってくれた。

「今年の落ち葉掃除もこれで終わりだな」

柿の葉が一枚もなくなったきれいな庭を見ておじいちゃんがつぶやく。その横顔は少し寂しそうだった。

「おじいちゃんは何で落ち葉掃除が嫌いなの？」

するとおじいちゃんは私の質問に大きく目を見開いた。

「嫌い？ 嫌いなんかじゃない。大好きだ」

「え？ 大好き？ 本当に？」

予想外の返答に疑り深く聞き返したが、おじいちゃんの答えは同じだった。

「ああ、大好きだよ。落ち葉掃除を『聞く』のが大好きなんだ」

「聞く？」

するとおじいちゃんは竹箒を指差した。

「おじいちゃんはね、おばあちゃんが落ち葉掃除をしている音を聞くのが好きだったんだ。ザッザッという規則正しい音が心地良くてね。おばあちゃんがいなくなって、もう聞けないと思っていたが愛美のおかげで聞くことができたよ」

おじいちゃんはそう言うと小さな子供を見つめるように優しい顔で私を見た。

「愛美は昔から落ち葉掃除が上手だな」

私は手にしている竹箒をぎゅっと握りしめ、おばあちゃんと落ち葉掃除をした時のことを思い出していた。

あの頃、私の背はこの竹箒よりもずっと小さかった。大きくて重い竹箒を持つ私の後ろから、おばあちゃんが手を添えて一緒に落ち葉を掃いてくれた。

『愛美、落ち葉を掃くときはね、ありがとうっていう気持ちを込めて掃くんだよ』

そう言っておばあちゃんはゆっくり優しく箒を動かした。

『ありがとう？ 何で？ 誰もいないよ』

きょろきょろと辺りを見回す私におばあちゃんは微笑んだ。

『柿の木はね、大事にお世話をすると、そのお礼に甘い実をつけてくれるの。でもね、甘い実をつけるためにはたくさんの葉っぱが必要なのよ。この落ち葉はその役目を終えて落ちた葉っぱなんだよ』

そう言っている間にも枝からはらりと葉が落ちてきた。上を見上げると枝には数えきれないほどたくさんの実がついていた。

『おばあちゃんはね、甘くて美味しいこの柿をみんなで食べられることがとっても幸せなの。だから柿のお世話をしてくれたおじいちゃんと柿の木にありがとうの気持ちを込めて掃除をしているんだよ』

『ふうん、そうなんだ！ 柿さんありがとう！ おじいちゃんありがとう！』

私は意味も分からずにそう繰り返して落ち葉掃除をしていた。二人で持つ竹箒がザッザッと音を立てながら葉を集めていく。それが楽しくて縁側でおじいちゃんが笑って見ていたことも気付かないくらい夢中で落ち葉を掃いていた。

あれから私は成長し、おじいちゃんは年を取って、おばあちゃんはいなくなりました。おじいちゃんの柿の木だけが昔と変わらずに今年も甘い実をつける。少しの間、黙って柿の木を見上げていたおじいちゃんは脚立を立てると木に上り、柿を一つ取った。

「これは愛美が好きな柿だ」

そう言って取ったばかりの柿を私の手に置いた。

「おじいちゃん、私が好きな柿がわかるの？」

「ああ、愛美がおいしそうに食べるのは固さの残る少しだけ熟れた柿だ。おばあちゃんも大好きだった柿だよ」

よく見るとその柿は木についている柿よりもほのかに赤く、温かい色をしていた。おじいちゃんが剥いてくれる柿が特別おいしいのは、私のために私好みの柿を剥いてくれるからだだった。

「愛美、いつでもまた柿を食べにおいで」

柿の木にはまだまだたくさんの実が残っていた。私は頷き、役目を終えた竹箒をおじいちゃんに渡す。

「おじいちゃん、私ね、来年も落ち葉掃除する。来年は今年よりも、もっと上手に落ち葉掃除できると思うんだ」

「そうか、それならおじいちゃんは今年よりももっとおいしい柿を用意しなきゃいけないな」

竹箒を手にしたおじいちゃんは皺で目がなくなるくらい嬉しそうに笑っていた。